

身近なまちの風景物語(1)

小さな中心

まちを歩くのが好きだ。

何かを探し求めるのではなく、何かが目に入るのを期待する。思いがけない偶然を待ち、それを楽しむ。

土浦のまちを歩いて、ふと目に留まったのは道路元標^{どうろげん}だった。新鮮な驚きがあった。にわかに胸の鼓動が増した。

駅前通りでありながら、おそらく通りがかる人が目にするのではない小さな石だ。地蔵でもない、信仰の対象でもない、ただの標石である。しかし、道路整備で移設を余儀なくされても廃棄されることなく、残された。

道路元標は、道路の起終点を示す標識である。大正時代の道路法によって各市町村に設置された。花崗岩で製作されたものが多いが、コンクリート製もあった。

道路元標はそのまちの中心に置かれた。その場所から遠隔地への距離の基点になる場所である。

日本橋は江戸の中心だった。橋の袂から続く町屋は多くの人々を受け入れた繁華街だった。五街道の起点として、江戸からの距離はここから測られた。東京市はこの日本橋を道路元標の地に定めた。

道路元標は既にその役割を終えたが、日本橋の橋詰めには現在も高さ数mの大きな道路元標が残っている。日本橋の意匠にあわせた装飾がされている。

土浦のそれは高さ数十cmにすぎない。小さいけれどもまちの中心だったことを証している。その脇には櫻橋という文字を刻んだ石も置かれている。

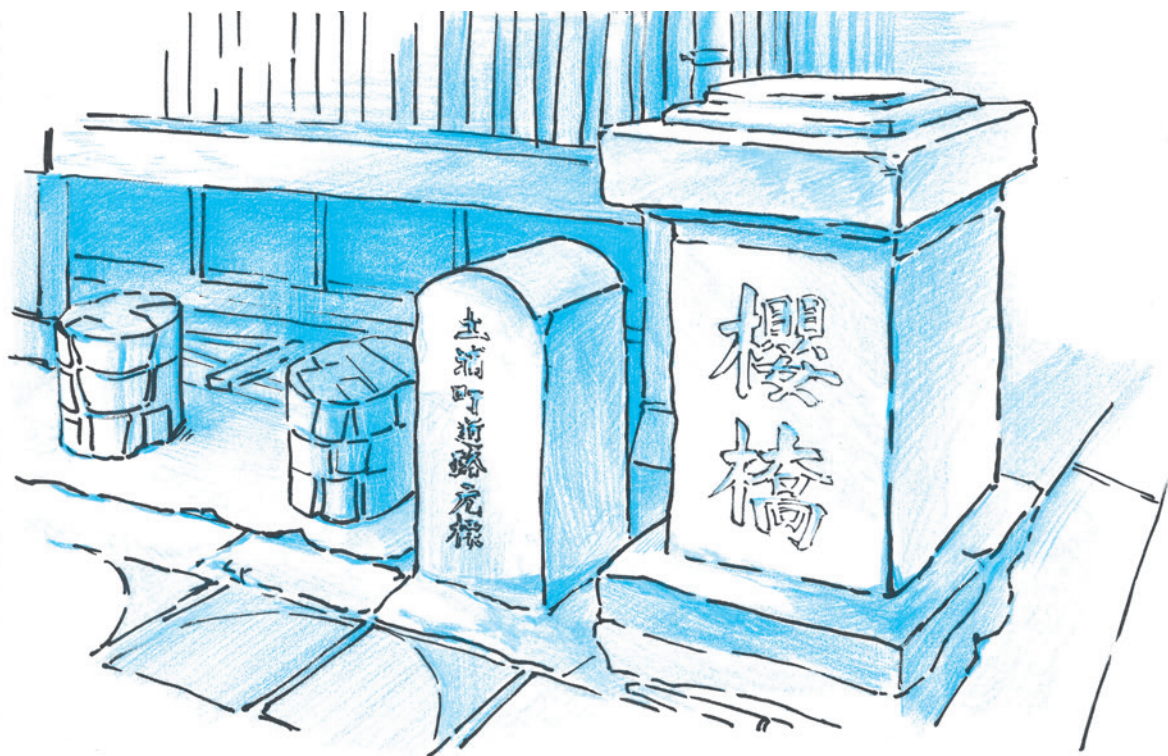
今は埋め立てられてしまったが、この駅前通りはかつて川だった。江戸時代の街道でこの川を跨ぐ橋が桜橋だった。つまり江戸の日本橋が土浦では桜橋だった。そして同様にこの橋がまちの中心だったのである。

標石自身の価値よりも、それがその地に置かれ続けることに意義がある。道路整備で場所が少し変わっても、この地がまちの中心だったことを証している。その風景がまちの履歴を物語る。

大子町でも道路元標を見つけた。探していたわけではなかったが、まちを歩いていたら、ふと目に入った。やはり小さく胸が高鳴った。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群3年）